

## 編集後記

『哲学の探求』第33号、どうにか完成させることができました。あらためて、ご寄稿くださった執筆者の皆様と、編集作業をサポートしていただいたすべての皆様に、心よりお礼申し上げます。

今回の『哲学の探求』第33号は、昨年夏のフォーラムのテーマレクチャー「認識論はどこへゆく？ 2」において講演していただいた伊勢田哲治先生、一ノ瀬正樹先生、金森修先生と、7名の個人研究発表者の方々より論文をご寄稿いただき、また、今年度からの新しい試みである冬季フォーラムで講演していただいた竹田純郎先生、横山輝雄先生からも、講演要旨をお寄せいただきました。さらに来年度のレクチャーである鈴木泉先生、古荘真敬先生、村上靖彦先生にも予稿をお願いし、ヴォリューム、内容ともに充実したものを作ることができました。とはいえ、この拙い編集者、細心の注意を払ったつもりではありますが、もし不備な点など目にとまりましたら何でも指摘ください。今後のより良い編集作業のための参考とさせていただきます。

さてここで、編集についての話題から離れることをお許しください。次回フォーラムの宣伝も兼ねた話になりますが。

最近気になっていることなのですが、このようなフォーラムのみならず、より大規模でオフィシャルな学会の運営に携わっている方々からも、「近頃の若手研究者は、自分の専門分野の研究に熱心なあまり、分野を越えた大きな学会に対して、魅力を失い始めているのではないか」という懸念の声を時折うかがうことがあります。私個人の周囲を見回しても、若干ながら確かに、そういう雰囲気を感じられます。しかし、当然のことながら哲学の問題はすべて関連しており、異なる分野や、異なる「哲学的伝統」のもとでなされて

いる思考に耳を傾ける、ということの重要性はいささかも揺るぐものではない、と私は考えます。

そして、まさにそこに、全国の様々な分野の若手研究者が集う「哲学若手研究者フォーラム」の存在意義の一つがあるわけですが、我々世話人会はさらに一步進んで、分野を問わず、発表を希望される若手研究者の方へ発表の場を提供するだけでなく、来年度のテーマレクチャーについては、今日においては大胆とも言える主題を採用し、いわゆる「大陸系」哲学の現在を語っていただけるレクチャーをお招きすることにいたしました。もちろんこれはお寄せいただいたアンケートの結果をふまえてのことではありますが、近年「現代英米哲学」の研究者も多数参加するこのフォーラムだからこそ、このような先生方にお話いただくのは有意義であろうし面白かろう、という考えのもとに、上記のテーマに決定したわけです。

そういうわけで、私個人としては、こういったテーマに馴染みの薄い方にこそ、今回はぜひ参加して頂きたいと願っています。なにとぞこの機会をお見逃しなく、「英米系」も「大陸系」の方も、「現代哲学」も「古典研究」も「応用」の方も、皆様お誘い合わせの上、ぜひ夏のフォーラムにお越し下さい。世話人一同、心よりお待ち申し上げます。

編集 杉左近 淳